

黒毛和種子牛にみられたフソバクテリウム菌による 化膿性髄膜脳脊髄炎の1例

西播基幹家畜診療所

○宮崎 俊輔 平岡 晃哲 菅 保礼 玉井 登 平井 武久 森本 啓介

フソバクテリウム菌は牛の消化管内に常在し、壊死桿菌症の原因菌としても知られ肝膿瘍などを引き起こす。今回、神経症状を伴い平衡感覚異常を呈した黒毛和種子牛1症例について病性鑑定を実施し、フソバクテリウム菌による化膿性髄膜脳脊髄炎と診断した。

材料および方法

症例は2014年12月29日生まれの黒毛和種雄子牛で、2015年6月18日と7月1日に食欲不振で治療していた。

7月5日、朝突然起立不能となり、体温39.3℃、首投げ出し四肢伸張横臥、眼球振盪の症状を呈するため、抗生剤、ステロイド、補液剤を投与した。7月6日状態変わらず予後不良と診断し、姫路家畜保健衛生所にて病性鑑定を実施した。検査項目は血液検査、病理検査、細菌検査とし、細菌検査では病変部位の細菌分離と同定キットによる細菌の同定を行った。

結果

血液検査：WBC 14,600/ μ L, AST 244U/L, CPK >2,000U/L, T-cho 49mg/dLであった。

病理解剖検査：大脳、小脳、脊髄が腫大し、右大脳視床付近に2cm大の膿瘍が存在した。脳脊髄液は増量し、淡黄色に混濁していた。また肺において右肺中葉が肝変化していた。

組織検査：大脳において視床下部の乳頭視床索に化膿性病変が散見され、周囲には円形細胞、好中球による囲管性細胞浸潤がみられた。小脳には髄膜に好中球浸潤、脊髄には円形細胞主体の囲管性細胞浸潤がみられた。肺において病変部に顕著なリンパ濾胞がみられた。

細菌検査：大脳および膿スワブからフソバクテリウム菌が分離された。

考察およびまとめ

今回の症例は神経症状を呈し、病理検査にて脳、脊髄の炎症像と大脳に化膿性病変を認め、細菌検査にて大脳および膿からフソバクテリウム菌が分離されたため、フソバクテリウム菌による化膿性髄膜脳脊髄炎と診断した。肺にも病変がみられたが、肺から菌は分離されず、フソバクテリウム菌が嫌気性菌であることから肺が原発病巣とは考えられなかった。従って、フソバクテリウム菌は肉眼では確認できなかった消化管粘膜の小さな損傷あるいはその炎症部位から侵入し、血行性に脳内に達したものと推論したが、侵入部位は確定できなかった。フソバクテリウム菌による病巣は様々な部位に形成されるが脳や脊髄からの分離報告は少ない。今回は脳、脊髄に病変が限局していたため神経症状のみを示した、稀な症例であった。